



幼児・児童における情動表出の発達に関する研究 - 怒りの主張的表出の検討 -

著者	平川 久美子
号	14
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教博第151号
URL	http://hdl.handle.net/10097/57634

ひ ら か わ く み こ
平 川 久美子

学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 記 番 号	教博 第 151 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 総合教育科学専攻
学位論文題目	幼児・児童における情動表出の発達に関する研究 －怒りの主張的表出の検討－
論文審査委員	（主査） 教 授 本 郷 一 夫 教 授 工 藤 与志文 准教授 神 谷 哲 司 准教授 深 谷 優 子

＜論文内容の要旨＞

情動には大きく 2 つの機能がある。1 つは個体の生き残りや繁殖を高度に保障するという生物学的機能であり、もう 1 つは個体間でのコミュニケーションを進行させるという社会的機能である。情動の中でもとりわけ情動表出は社会的機能と関連するものであり、他者との関係を構築していく上で非常に重要な役割を果たしている。一般に、情動は年齢の増加に伴い、状況に合わせて適切な質や量へと制御され、表出されるようになっていくことが知られている。従来の情動表出に関する研究では、主に抑制的な情動表出に焦点があてられてきた。しかしながら、自分の情動を実際より強めて表出する主張的な情動表出は、他者から保護や援助を引き出す、自己の精神的健康を高める、肯定的な人間関係を構築するなど生物学的にも社会的にも重要な役割を果たしている。そのような観点から、本研究では情動の主張的表出、とりわけ怒りの情動表出の主張的側面の発達について明らかにすることを目的とした。第 I 部では、対人関係における情動の機能、情動の発達に関する諸理論について概観し、幼児期・児童期における情動理解および情動表出の発達について述べた。その上で、本研究で

は、「自分の情動そのままの表出や自分の情動を実際よりも強めた表出」を情動の主張的表出、「自分の情動を実際よりも弱めた表出やニュートラルな表出」を情動の抑制的表出とそれぞれ定義し、幼児期から児童期にかけての情動表出の発達およびその発達に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とすることを述べた。

第Ⅱ部では、仮想場面を用いた5つの研究を通して、幼児・児童の情動表出の発達について検討した。研究1では年中児、年長児、小学1年生、2年生を対象に、怒りの抑制的表出が動機づけられる場面における情動表出について検討した。その結果、行動表出においては年齢差がみられなかったものの、表情表出においては年中児から小学1・2年生にかけて怒りをより弱めて表出することが示された。

研究2では、年中児、年長児を対象に、怒りの主張的表出が動機づけられる場面における表情表出について検討した。その結果、年中児よりも年長児のほうが表情で怒りをより弱めて表出することが示された。このことから、子どもが怒りの表出が相手に及ぼす否定的影響を考慮したため、表情表出が抑制的になった可能性が示唆された。

研究3では、研究2における問題点を改善した上で、年中児、年長児、小学1年生、2年生を対象に、怒りの主張的表出が動機づけられる場面における表情表出について検討した。その結果、表情表出においては年齢差がみられなかったものの、言語的主張をすることによって表情表出が抑制的になっている可能性が示唆された。

研究4では、年中児、年長児、小学1年生を対象に、言語表出の要因を統制した上で怒りの主張的表出が動機づけられる場面における表情表出について検討した。その結果、言語的主張を行わない場合は年中児から小学1年生にかけて表情で怒りをより強く表出することになることが示された。また、小学1年生は言語的主張を行う場合よりも行わない場合のほうが表情で怒りをより強く表出することも示され、情動表出における表情と言語という2つのモダリティ間の相補的關係の中で表情と言語それぞれの表出が決定されることが示唆された。

研究5では、年中児、年長児、小学1年生を対象に、怒りの主張的表出が動機づけられる場面における表情表出と他者信念の理解との関連について検討した。その結果、他者信念を理解していない者よりも理解している者のほうが表情で怒りをより強く表出することが示された。これより、他者信念の理解は情動の主張的表出の発達の重要な認知的基盤となっていることが明らかになった。

第Ⅲ部では、研究1から研究5の結果を踏まえて情動表出の発達モデルを提案するとともに、本研究において残された課題と今後の展望について考察した。本研究によって、情動の主張的表出が幼児期から児童期にかけて顕著に発達し、その発達は他者信念の理解の影響を受けることが示された。さらに、情動表出は相補性の理解の発達を受け、表情や言語など情動表出のモダリティ間でバランスを調整しながら各モダリティの表出が決定されるようになっていくというプロセスが示された。これらの結果から、表示規則の理解、社会的望ましさの理解、他者信念の理解、相補性の理解などの影響を示す情動表出の発達モデルを提案した。最後に、今後、認知や言語が情動に及ぼす影響だけでなく、情動が認知や言語に及ぼす影響にも着目した研究、心理学や脳科学など複数の研究領域を融合させた研究を通して、情

動発達メカニズムの解明が望まれることを指摘した。

＜論文審査の結果の要旨＞

従来、情動表出の発達に関する研究では、表示規則の獲得など、主として情動を抑制する方向の発達に焦点が当てられてきた。しかし、対人関係場面では、情動の抑制だけでなく、自分の情動を実際よりも強めて表出するといった主張的な情動表出も見られる。また、主張的な情動表出は、他者から保護や援助を引き出したり、自己の精神的健康を高めたりするなどの点で生物学的機能と同時に社会的機能をもつと考えられる。そのような観点から、本研究では、とりわけ「怒り」に焦点を当て、幼児期から児童期にかけての主張的な情動表出の発達について明らかにすることを目的とした。

本論文は3部から構成された。第Ⅰ部では、情動表出の発達に関する従来の研究を「情動表出」と「情動表出の理解」の2側面から概観することにより、①情動表出を主張と抑制の2つの側面から位置づけ、主張的な情動表出がどのように発達するのかを明らかにすることの重要性、②とりわけ、「他者信念の理解」に着目し、主張的な情動表出の発達に及ぼす影響を検討することの重要性について論が展開された。

第Ⅱ部では、幼児期から児童期を対象とした5つの研究を通して、主張的な情動表出のプロセスについて検討がなされた。その結果、①怒りの抑制的表出が動機づけられる場面においては、幼児期から児童期にかけてより抑制的な情動表出をするようになること（研究1・2）、②怒りの主張的表出が動機づけられる場面においては、幼児期から児童期にかけてより主張的な情動表出をするようになることともに、児童期には表情と言語というモダリティ間のバランスを調整しながら情動表出をするようになること（研究2・3・4）、③他者信念の理解に伴って、怒りの主張的表出が動機づけられる場面においてより主張的な情動表出すること（研究5）などの結果が見出された。

第Ⅲ部では、これらの結果を踏まえて、「表示規則の理解」「社会的望ましさの理解」「他者信念の理解」「相補性の理解」といった4つの要因を想定した怒りの主張的な情動表出に関する発達モデルが提示された。また、今後の課題として、情動という1つの領域に閉じたものではなく、認知や言語などの複数の領域を統合した研究、とりわけ情動が認知や言語に及ぼす影響に着目した研究の重要性が指摘された。

情動表出及び情動表出の理解の発達における言語の役割、情動表出の発達における社会・文化的要因についての考察、相補性の位置づけについてはさらなる検討が必要だと考えられる。しかし、①幼児期から児童期にかけての情動表出の発達を捉えるための実験的手法を開発したこと、②その手法を用いて幼児期から児童期にかけての主張的な情動表出の発達過程について明らかにしたこと、③主張的な情動表出の発達に影響を及ぼす認知的要因について明らかにし、主張的な情動表出の発達モデルを提示したことは現在の発達心理学に重要な知見を付け加えたと考えられる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。